

廣池千九郎におけるアイデンティティの確立

—井上頼圀との関わりにおいて—

欠端 實

もくじ

はじめに

一、明治維新と井上頼圀

二、廣池と皇典講究所

三、廣池千九郎の自覚

四、小川含章その他の影響

五、京都における廣池千九郎

六、結び

はじめに

人は誰しもアイデンティティを確立するときには自らの師とすべき人物を選ぶに相違ない。これから論じようとする廣池の場合もまた同様であった。しかも、廣池の生まれた時代はあたかも明治維新という激動の時期。自らの行く道と国家の未来像とが重なり合って描き上げられた時代であった。その時、外圧に触発されていやが上にも意識されてきた和魂。欧米の文明を学ばねばならないとする意識と、自らの拠って立つ地盤を確認せねばならないとする意識の相克。廣池は和魂と学才（皇学、漢学、洋学）を兼備した人物になることをめざした。時代の要請と自らの出自とから、ある人間グループの中に身を投ずる決断をする。では彼に与えられた選択の道とはどのようなものであったのだろうか。

従来、廣池の思想研究は、彼が生涯にわたって移り住んだ居所を中心に、中津時代をスタートにして、京都、東京（前期）、伊勢、奈良、東京（後期）、千葉時代と区分して、時代ごとに分断して考察されることが多かった。しかし、このような方法では、彼の思想の特色を鮮明にとらえることはできない。

廣池は十五歳前後、江戸時代ならばさしずめ元服の時期に、中津において重大な選択をする。それはとりもなおさず自らの思想的立場を表明することに他ならなかった。そしてその決断は、結局、井上頼圀という人物を選択するという形で具体化された。この選択、決断が、廣池のその後の歩みを決定したといっても過言ではない。

郷里の中津を出てから京都、東京に向かうが、京都での研究・出版活動も、東京での編纂員としての活動も、さらにその後の伊勢・奈良時代における日本文化のアイデンティティ研究も、井上との密接な関係から生み出されてきたものであって、各時代の研究成果は、井上との関係を抜きにしては考えられない。晩年の「モラロジー（道徳科学）」の学的樹立とそれに基づく社会教育活動も、日本のアイデンティティ研究によっ

て得られた成果が思想的核になっている。敢えて言えば、井上の影響は生涯を貫いているということができよう。

このように見てくるならば、郷里中津における思想的選択は、その後の生涯を貫いて変わることがなかったということが出来る。

小論では、各時代において廣池が交わりをもった人物は、いずれも、井上を中心とした一群の人々であったことを具体的に示していきたい。

一、明治維新と井上頼圀

廣池が生涯において師と仰いだ人物は、井上の他に小川式（通称弘藏、含章と号した）、穂積陳重、佐藤誠実、渡辺雲照等であるが、このほかにも京都では富岡鉄斎の恩顧をうけている。廣池が郷里の中津を出て最初に赴いたのは京都であった。京都では富岡鉄斎、井上頼圀と出会うことになるが、廣池が出会った鉄斎、井上はどのような人物であったのか。まず最初に、維新の際に彼らがどのような行動をとっていたのか紹介しておきたい。そのことによって、廣池の思想的立場が鮮明になるはずである。

維新の際、廣池は生まれたばかりであったが、井上や鉄斎は勤皇の志士として京都にいた。

井上は廣池に先立つこと二十七年前の天保十（一八三九）年に生まれた。井上の師、権田直助は、平田国学をとり入れた独特な古医学を説いた異色の医家であったが、文久二（一八六二）年から翌三年にかけて、草摺派の志士として渡辺玄包とともに京の地にあつた。（補注）権田は長州を経ていったん帰郷したが慶応三（一

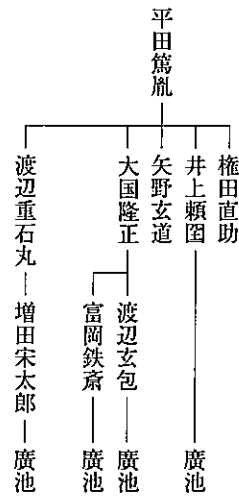
八六七)年、討幕派としてふたたび上洛している。⁽¹⁾この年、井上も上洛した。しかし師の権田直助に機密の要件を委任され、年末には江戸にもどった。翌明治元年七月二十日、師の権田直助が国事に尽瘁するのをたすけるため、井上はふたたび上洛の途につき、八月十四日、入洛した。このときの様子を『井上頼圀翁小伝』はつぎのように記している。⁽²⁾

「勤王討幕論の沸騰した際の如きは、妻子を江戸の近在にあづけたまま筆を投じて剣に換へ、奮然京都に上つて尊王の大義を鼓吹し、維新後は再び読書の人となつて盛んに皇学を唱へ……(下略)」

井上は八月の入洛以後、京都にとどまり翌年明治二年三月、東京に戻っている。明治二年三月というのは天皇が東京に向かったときである。井上は東行する天皇に随行する形で東京に赴いたのかもしれない。意外なことにこの時富岡鉄斎も天皇に随行して東京に向かっている。井上と鉄斎はともに随行者として東京に向かった可能性が高い。

富岡鉄斎は井上よりも三歳年上である。嘉永三(一八五〇)年ころ大國隆正に師事したといわれている。『国学者伝記集成』⁽³⁾によれば、権田直助、井上頼圀、矢野玄道、大國隆正は、系譜上いずれも平田篤胤の門弟であった。大國隆正の弟子に富岡鉄斎や渡辺玄包がいた。渡辺玄包の弟子が廣池であった。系譜を图示すれば下記のようになる(次頁)。井上と鉄斎とが系譜的にきわめて近い位置にいたことが判明する。

年譜によれば、鉄斎は「文久二(一八六二)年、勤皇のことをはかる」と記されている。⁽⁴⁾翌三年には、友人が天誅組に参加して戦死したり、また親友が天誅組に武器を渡したとして投獄されたりしている。同じ



年、生野でも友人が挙兵して敗れている。こうした人物を友人にもつ鉄斎は、単なる画家ではなかったことがわかる。鉄斎は自らを「元来小年ヨリ皇学ニ従事ス」と述べている。⁽⁵⁾思想的には井上と近い。明治元年から二年にかけて七ヶ月あまり京都に滞在した井上は、鉄斎とあい識る機会があったのではないかと推測される。

鉄斎は、明治二年三月七日、天皇の東行に随行し、二十八日には東京に着いている。(なお鉄斎は、明治五年の明治天皇の九州巡行に際しても随行している。)上述のように井上も三月に京都を離れ東京に赴いている。もし二人がともに天皇の随行者として行を共にしていたとすれば、二人は、明治元年から二年にかけての時と同様、語りあうべき多くの時間をもったことになる。その可能性が大である。根拠を述べてみよう。

明治五年に、鉄斎は佐々木ハルと結婚する。ハルは同郷の矢野玄道の妹が五条家に仕えているのを頼って上京、同家に奉公していた。この年、縁談が具体化し結婚となった。矢野はしばしば鉄斎の家に来訪し書籍

図1 廣池千九郎・井上頼圀・富岡鉄斎・矢野玄道

井上頼圀 (1839~1914) 篤胤 (没後) 門下
 慶応3年 (1867) 上洛、年末帰東
 明治元年 (1868) 8月上洛、勤皇の国学者と交わる
 翌年 (1869) 3月東京へ
 明治14年 (1881) 矢野と共著『橋軒雑記』出版
 明治15年 (1882) 皇典講究所設立
 明治22年 (1889) 『皇典講究所講演』刊行開始
 史学普及雑誌と深い関係あり
 明治23年 (1890) 皇典講究所、古事類苑の編纂
 同年、皇典講究所が国学院を設立

廣池千九郎 (1866~1938)
 神官の家の子孫として生きる決意
 和魂学才 (学とは漢学・洋学・皇学)
 明治16年 (1883) 皇典講究所大分分所教師と連絡
 大国隆正の門人、渡辺玄包に就く
 明治20年 (1887) 井上に葉書を出す
 明治24年 (1891) 廣池長吉、国学院入学
 明治25年 (1892) 京都へ。史学普及雑誌刊行



公池守齋
『伝記』p435

富岡鉄斎 (1836~1924)
 天保12年 (1841) 大国隆正京都で開塾
 1845年ころ大国隆正について?
 慶応元年 (1865) 矢野はしばしば鉄斎
 の蔵書を借りている
 文久2年 (1862) 勤皇のことを図る
 多くの神官を歴任
 画業は皇学の実践
 一国の元氣は神社崇拜から出る
 万巻の書を読み万里の路を行く
 老而益学 (老いてますます学ぶ)
 旧誼 (ふるきよしみ) を忘れず

矢野玄道 (1823~1887) 篤胤 (没後) 門下
 皇典講究所文学部長
 『皇典翼』 『神典翼』
 世をてらす月日のかげを見ても知れ
 つとめてやまぬ神のみいづを



老而益学
(奥邨竹亭)

を借覧していた様子である。鉄斎の「交友話記」慶応元(一八六五)年条には、「矢野茂太郎玄道、屢來訪。余蔵スル所ノ書籍ノ珍敷ヲ貸ス。一ニ部外ニ、笈埃隨筆モ貸ス」とあり、二人の関係が以前から親密な関係にあることをうかがわせる。のみならず「交友話記」は続けて、「前月敦賀ニテ武田耕雲斎以下斬殺ヲ話ス。感傷ノ和歌數首ヲ詠ズ。」と記している。両者ともに勤皇の士として思想的に深く結ばれていたことがわかる。

矢野と井上はともに平田篤胤の没後の門下生であった。後年、矢野と井上は、明治十四年に共著『橋軒雑記』を出版し、十六年には、ともに、宮内省を経由して『六国史』校訂を囑託されている。また矢野は、明治十五年に井上らが設立した皇典講究所の文学部長に就任している。

このような関係をみれば、鉄斎と井上とは矢野を介しても早くから結ばれていたと思われる。

後年のことになるが、廣池が京都に出てきた翌明治二十六年秋、『平安通志』の編纂が湯本文彦の下で開始される。その編纂員の中に囑託員として富岡鉄斎の名がみえている。そして校閲者の中に井上頼圀の名がみえている。校閲者の中には井上グループともいべき川田剛、黒川真頼、小中村清矩、小杉楳邨、栗田寛らの名前もみえている。編纂関係者は京都と東京に別れて住んでいたため会う機会も少なかったと思われる。しかし、それでも編纂関係者間ではお互いに相手を認知し、連絡もしあっていたはずである。当然、井上と鉄斎との間でも何らかのやりとりがあったに相違ないと考えられる。

さらに後年のことになるが、明治三十一年五月二十四日、鉄斎は南都に赴く汽車の中で井上と出会う。年譜では「邂逅(向)」と記されている。文字通り「邂逅」であったに違いないことは、井上が、帰途、二十一日に鉄斎を訪ねていることから推測される。維新の際に二人が京都で出会っていたという事実があった

こと、『平安通志』でともに編纂にたずさわっていたからこそ「邂逅」という表現が使われたのだ、と考えたい。

井上の他に、小川含章も、慶応元（一八六五）年ころ各地の志士を訪ねたという。小川も単なる漢学塾の教師ではなく、尊王攘夷の念が篤い人物であったことがわかる。

また雲照律師は明治元年、廃仏毀釈の声が高まるとともに、上表文、建白書を数度にわたって提出し、行動半徑を京都から東京へと拡大していった。維新の際には雲照律師も京都周辺にいたのかもしれない。

雲照律師は戒律を厳格に守ることと、皇室を尊崇する念の篤かったことで有名であった。後年、廣池が律師の下に通うことになったのは、皇室尊崇の念が篤い点に惹かれたからではあるまいか。

以上、維新の際に、廣池の師である権田、渡辺玄包、井上、鉄斎、小川、雲照が尊皇の念に燃えてはげしい行動をとっていたことを述べた。廣池の師はいずれも単に書齋に閉じこもっている学者ではなかった。そして行動の人、井上と鉄斎とは、維新の際に、京都で深く知り合っていたのではあるまいかと推測されることを述べた。

二、廣池と皇典講究所

廣池は、郷里の中津においてどのようなアイデンティティを確立したのか。その要因の一つと考えられるのは、明治十六年、大分に開設された皇典講究所大分分所を通じての、井上との出会いであった。以下、その間の経緯を述べたい。

開国したばかりの日本には、国家の未来をどのように築きあげるかをめぐって、国学（皇学）派、漢学派、洋学派の熾烈な指導権争いがあった。中央の動きは地方にも波及していった。中津にあって廣池はどのような立場に立とうとしたのであろうか。

国全体をあげて欧化の波が強まる中、その欧化主義にたいして不安を抱く人々によって、今こそ日本文化を守り、次世代へ継承していかねばならないと考えられるようになった。そこで、明治十二年には古事類苑編纂の事業が始められ、明治十五年には井上頼圀の尽力によって皇典講究所（修業年限三年）が設立され、東京大学には古典講習科が開設されるなど、皇典に関する教育機関が整えられていった。同年には皇典講究所の分所が設置され、「明治十五年九月九日、三府四十県に分所を置き、生徒教養、神官試験の二事を分担せしめた」という。続いて十六年には神宮皇学館が開設された。皇典講究所の陣容は下記の通りであった。⁽⁸⁾

川田剛	山田有年	平山省齋	小中村清矩	権田直助	井上頼圀	松岡郁之進	阪正臣
矢野玄道	久保季茲	木野戸勝隆	秋月胤永	矢野万太郎	林襲臣	橋本章	橋本実梁
松岡明義	徳岡久遠						

さらに以下の人々も参加する。

黒川真頼	久米幹文	佐藤定介	木村正辞	本居豊頼	物集高見	佐藤誠実	小杉楯邨
落合直文	内藤耻叟	松本愛重	小中村義象	小宮山綏介	三上参次	石井小太郎	萩野由之
横井時冬	栗田寛						

東京大学の古典講習科の講師陣は下記の通りであった。

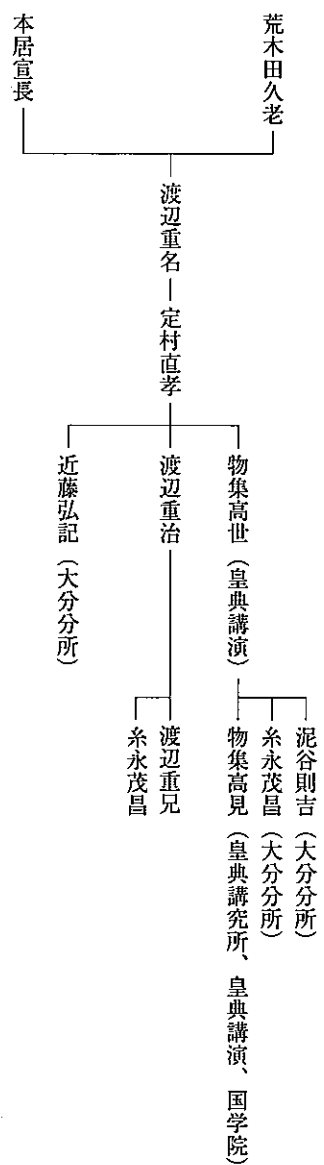
小中村清矩 岡松麩谷 木村正辞 内藤耻叟 飯田武郷 島田重礼 井上哲次郎 中村敬宇
 大沢清臣 久米幹文 小杉楳邨 佐藤誠実 松岡明義 三島毅 物集高見 本居豊顕
 皇典講究所の分所は、多くは神社に設置され、地域の神社を通して情報が伝達されていたという。大分にも豊後国大分郡大分町二十番地（後に鶴崎町）に設立された。⁽⁹⁾
 明治十七年当時、皇典講究所大分分所の役員は、下記の通りであった。

田近陽一郎、糸永茂昌、泥谷則吉、近藤弘記、関真龍、榎本武雄、鶴峰比傳伎、佐藤文彦、橋迫菅夫、橋佐古春樹、八阪秀健、吉岩常德、長山比呂志、友久吉、小深田範江、吉野正利、小石江島、幸島数江、池永静馬、上田美年

明治十八年七月時点で、役員として委員に到津公誼（宇佐神宮宮司）、糸永茂昌（社掌、大講義）、田近陽一郎（西寒多神社宮司兼権大講義）、委員補に関真龍（早吸日女社、兼権根津彦社祀官）、泥谷則吉、近藤弘記（西寒多神社禰宜）等があてられていた。⁽¹⁰⁾ 近藤、泥谷、糸永の三人は、本居宣長・荒木田久老―渡辺重名の流れをくむ国学者であった。皇典講究所の物集高見は高世の子であり、かつまた高世の弟子として泥谷、糸永と同輩であった。近藤弘記は高世と同輩であった。図示すると下記のようなになる。⁽¹¹⁾

明治二十三年当時の分所所長は池永静馬であった。
 大分分所の活動がいつから開始されたのかは不明であるが、遅くとも十八年七月までには軌道にのっていた模様である。⁽¹²⁾ しかし「九州に於いては大分県分所の活動が目覚しく」とされているところから判断すれば、分所設立の時期も早かったのではないかと考えられる。

廣池の履歷書によれば、「十六年九月、再び大分に遊びて小川含章に従い専ら漢学を学び、傍ら大分皇典



講究所教師に就きて和学を修む⁽¹⁴⁾と記されているところから、廣池はこの大分分所に「入所」したわけではないが、分所の教師に教えを受けていたことが判明するし、その時期は、小川含章の麗澤館在塾時代と重なる時期であった。廣池の麗澤館入塾は十六年九月三日である。廣池が在塾した麗澤館も大分分所もともに同じ鶴崎町にあった時期があった。とすれば麗澤館に在塾しながら大分皇典講究所分所教師に教えを受けていた可能性が強い。このように考えれば、明治十六年には既に大分分所が設立されていたことになる。廣池が誰に教えを受けていたのかは不明である。推測の手がかりとなるのは、後年のことに属するが、大正七（一九一八）年四月二十五日、廣池が大分の宇佐に出かけたとき、糸永茂昌が廣池に講演会の開催を依頼していることである。⁽¹⁵⁾ あるいは、糸永が、明治十六年当時の「教師」であったのかもしれない。糸永は国学を渡辺

重春に師事して学び、明治元年には上京して矢野玄道に師事した。三年後に帰国し、神道教会を中心に活躍した。一方で私塾を開塾し、前後数百の子弟を收容し、大分県の国学教育に大きな足跡をのこした。彼の真髓は、強烈な愛国思想をいっていたところに認められるとい⁽¹⁸⁾う。

大分皇典講究所分所を通じて東京の皇典講究所の諸活動および井上を知った廣池は、大分から中津にもどつてからも井上と連絡をとり続けたと述べている。

「然るに明治十八年家政の都合により帰郷せしと雖も猶ほ小川含章を師とし、且つ遙かに東京に於いて当時日本古典学の泰斗と称せらるる所の井上頼園翁を師として日本の古典及び古代制度を研究せり。」⁽¹⁷⁾

現在残されている記録によれば、廣池は明治二十年八月二十二日に、「西京」から井上頼園宛葉書を出している⁽¹⁸⁾。初対面の人に最初に出状する場合は葉書ではなく書状であろうから、これ以前にすでに書状を出していたと考えられる。井上家には年号不明の書状が保管されていて、差出地は「大分県豊前國中津」とな⁽¹⁹⁾っている。この書状の差出年が判明できないのが残念である。

皇典講究所は明治二十二年二月から『皇典講究所講演』を毎月二冊のペースで発行していく。皇典講究所が国体に基づいて法の研究をし、内外の思想と比較検討し、その成果を発表しようとしたものであった。この『皇典講究所講演』の発行は、同時に皇典講究所の財政を支えることになればという願いもこめられていた。したがって発行後は全国の分所に配布され、購読者に売りさばかれていった。廣池も早くからこの『講演』を読んでいた。『皇典講究所講演』の執筆者はどのような顔ぶれであったであろうか。『講演』は明治

二十二年二月十五日に創刊され、明治二十九年三月一日の一七〇号をもって廃刊となっている。以下に、氏名と講演が掲載された回数を掲げておく。

木村正辞 19 有賀長雄 11 井上毅 2 小中村清矩 26 黒川真頼 27 村岡良弼 25 落合直澄 18 小宮山綏
介 50 吉岡徳明 4 久保恵郷 1 丸山正彦 21 佐藤定介 1 本居豊頼 23 落合直文 5 物集高見 3 内
藤耻叟 81 織田完之 3 小杉樞 34 松岡明義 2 小中村義象 16 飯田武郷 37 井上頼園 4 関根正直
25 萩野由之 35 三上参次 6 山田顕義 2 佐藤寛 31 清水市太郎 2 宮地巖夫 5 大野太衛 2 川田
剛 6 高津敏三郎 1 菅喜田和三郎 9 阪正臣 2 小田清雄 2 三橋要也 3 久米幹文 7 本居内遠 1
西村茂樹 2 栗田寛 53 目黒和三郎 11 横井時冬 18 松本愛重 14 佐藤誠実 1 高山昇 3 石井小太
郎 1 飯島誠 1 増田于信 2 物集高世 5 木村春太郎 8

廣池は京都に出て『史学普及雑誌』を発行するが、その三号までの原稿を、すでに郷里中津において準備していたという。その三号までの記事の内、一号には井上の祝辞や久米幹文の祝詞が載せられ、二号、三号には『皇典講究所講演』に掲載された講演論文が転載されている。合計すると『講演』から『史学普及雑誌』への転載記事は二十編にも及んでいる。どの雑誌からの転載記事なのか不明のものも多く、正確なことはわからないが、とにかく『史学普及雑誌』が、井上グループの人々によって他誌に執筆掲載された論文、ないし『講演』掲載論文を転載するという形で、毎号刊行されていたのである。ここにも井上の影響の大きさを読み取ることができる。

皇典講究所は明治二十三年に国学院を開校し、国史、国文、国法を教授することとなる。すると、翌明治二十四年、廣池はさっそく弟の長吉を入学させている。廣池が兄弟して井上の思想に共鳴じていて、井上た

ちの行動をよく知っていたことがわかるのである。以下に、国学院の教壇に立った人々の名前を示しておく。大部分が皇典講究所のメンバーと重複している。

市村賛次郎	西村茂樹	飯田武郷	萩野由之	川田剛	阪正臣	高津敏三郎	島山健
内藤耻叟	井上頼圀	小中村清矩	落合直文	有賀長雄	大瀬甚太郎	佐藤寛	久米幹文
木村正辞	黒川真頼	三上参次	島田重礼	小中村義象	本居豊顕	物集高見	今泉定介
関根正直	久保恵鄰	丸山正彦	菅喜田和三郎	樋山資之	宮崎道三郎	松野勇雄	磯田良
坪内雄蔵	渡辺董之助	野口藤吉郎					

明治二十三年、皇典講究所は国学院を開校するとともに、『古事類苑』の編纂事業を引き受けることとした。それまでは、委員長、小中村清矩のもと東京学士会院が担当していた。(皇典講究所の所管は明治二十八年まで続き、二十八年に神宮司庁に引き継がれていく。)編纂事業の引き受けは井上の熱意によるものだと言われている。廣池はこうした動きもよく承知していたはずである。しかしこの時点では、廣池自身も、『古事類苑』編纂事業に参加するとは考えていなかったかもしれない。ただし、廣池が明治二十八年から『古事類苑』の編纂事業に加わることになる状況が段々と醸成されていたのだということは言えそうである。ここでも煩をいとわず明治二十三年からの『古事類苑』編纂事業に加わった人の名前を記しておきたい。

検閲委員長	川田剛
検閲委員	黒川真頼 木村正辞 本居豊顕 井上頼圀 小中村清矩
編集委員	内藤耻叟 和田英松 佐藤珠 佐伯有義 小宮山綏介 小杉樞邨 松本愛重 佐野久成 石井小太郎 黒川真頼 横井時冬

廣池との関連で注目されるのは、明治二十六年から京都で始まる『平安通志』の編纂委員となる人物二人(和田英松、佐藤珠)と、『平安通志』の校閲者となる人物五人(川田剛、小中村清矩、黒川真頼、井上頼圀、小杉樞邨)が『古事類苑』編集委員の中に含まれていることである。ここには登場していないが『皇典講究所講演』に二回登場する増田于信も『平安通志』の編集委員となるのであった。

ここには、東京の皇典講究所所管の『古事類苑』編纂関係者や『皇典講究所講演』関係者と、京都の『平安通志』編纂関係者との間には、人的交流があったことが示されている。このようになった理由は、京都における人材不足のために、東京在住の研究者も『平安通志』編纂に参加することが求められたためだった。

廣池は明治二十七年八月から『平安通志』に関係することとなるのであるが、廣池は既に井上と連絡がついていたし、『平安通志』の嘱託員となっていた鉄斎の知遇をも得ていたのである。廣池が、『平安通志』に関係し、やがて『古事類苑』の編纂員となる下地はできあがっていたと考えられるのである。

以上、大分の皇典講究所分所を通じて東京の井上頼圀を識り、ついで『皇典講究所講演』を読むようになり、井上グループに身を投ずるようになっていった経緯を述べた。その後、廣池は国学院の開校を知ると、翌年、弟を入学させた。同時に、井上が『古事類苑』編纂事業にも乗り出していったことを知るようになるのである。大きな編纂事業の際には、東京と京都との間に人的交流が行われるようになっていた。廣池が『平安通志』にかかわったとき、後の東京での『古事類苑』編纂員としての活動が約束されていたのかもしれない。

では、時代は少しさかのぼるが、郷里中津における廣池の動きをみていくこととしたい。

三、廣池千九郎の自覚

廣池千九郎は一八六六年、半六、りえの子として生まれた。祖母のカツは廣池家から今永忠三郎に嫁したが、子供がなかったため、弟の半六を準養子として迎え入れた。廣池が誕生した頃、父親の半六は、家産等はそのまま今永家のものを受け継ぎながら、姓は廣池を名乗っていたもようである。したがって千九郎は生まれながらにして廣池姓であった。

廣池が生まれた家は、今永の分家であった。今永の本家を真ん中にして、左右に一軒ずつ分家としての家があったが、その分家としての今永忠三郎の家であった。したがって廣池の生家の隣は今永の本家であり、さらにその隣は分家であった。誕生以来廣池姓を名乗ってはいしたが、今永の人間として生活していたに相違ない。そこで幼少年期に、廣池の人間として生きるのか、今永の人間として生きるのか悩むこともあったかもしれない。しかし結局、姓は廣池であっても、今永の人間として生きる決断をした。そしてそれは終生変わる事がなかった。

「私儀は大分県下毛郡大幡村薦社と申す小社の旧社人の家筋に生まれ候ものに御座候故、夙に家声再興の愚考より国学に志を立て申し候。」⁽²⁰⁾

薦社を預かる神官の家とは今永家のことである。少年期の廣池は自らを今永家にアイデンティファイする決断をしたのであった。そこにいたる経緯は不明であるが、そのような決断をしたのは、明治十三年、十四

歳のとき、郷里で助教になったことが契機だった。

「助教となる。家系を知って奮発す。」⁽²¹⁾

こうして、江戸時代ならばさしずめ元服の時期に、廣池は自らの立場をある決意をもって選択したのであった。次の資料は、廣池が今永（神官）の家系に連なる人間として生きていく決意をしたのは、小さくは家系再興の夢を持っていたためであったことを示している。

「予はもともと田舎の小神官の家に生まれたれば、幼より国学をもて家を立てんと思ひしも……⁽²²⁾」
 「予、名家の後を承け、之を再興せんと欲して、奮闘多年遂に今日聊か内外の学界に名を知らる。」⁽²³⁾

このようにして神官の家に連なる人間として生きていく決意をした頃、たまたま大分に遊学したが、大分に皇典講究所の分所が設置されたので、廣池は分所の教師に就いて国学を学び始めたのであった。上述したように、皇典講究所の所員は神官である人が多かった。大分分所の所員もほとんど神官であった。神官の家の裔孫の自覚を持つにいたった廣池にとっては、皇典講究所の関係者は、思想的立場を同じくする安心のできる人々であったに相違ない。とは言っても、廣池の目はすでに西欧に向かって開かれていた。したがって国学者の中に尚存在していた旧来の陋習に拘泥する人々とは無縁であった。

廣池は皇典講究分所を通じて井上その他の人物を知る。それとともに明治二十二年以降「皇典講究所講

演」に掲載された内藤耻叟その他の論文によって、大いに国体観念を養成されたのではないかと考えられる。内藤との関係が密接であったことは、『皇典講究所講演』に掲載された内藤の論文が『史学普及雑誌』に何度も掲載されたことにもはつきりと示されている。⁽²⁴⁾

明治二十年には皇典講究所に国学院が設置され、明治二十二年に国学院の授業が開始される。翌年の二十四年、弟の長吉を国学院に入学させている。後年になるが、明治三十二年には弟の又治を国学院に入学させている(三十五年卒業)。廣池家の男兄弟三人とも皇典講究所ないし国学院に深く関係している。これもまた廣池千九郎の意志であった。

「予はもともと田舎の小神官の家に生まれたれば、幼より国学をもて家を立てんと思ひしも……(略)子が愚弟二人まで国学院に入れて卒業せしめたるを見て予の志のある所を察し給え。」⁽²⁵⁾

神官(今永)の家の人間として生きる自覚を持つにいたった廣池は、自らの立場をより普遍性ある世界へと発展させては行ったが、基本的には、生涯その立場を変更することはなかったとみられる。一つの例として、落款「公池守齋」の使用がある。公池とは今永家が守っていた薦を採るための池のことであり、公池守とは今永家のことを指している。落款はその裔孫であるという自覚を示すものである。

廣池は、大正二年正月、それまで深い恩顧を受けていた矢納幸吉に贈った揮毫「慈恩高於山深於海」(慈恩、山よりも高く、海よりも深し)に、落款として「公池守齋」を使用している。廣池が大正時代に至ってもなお今永の人間としての自覚を持っていたことが判明するのである。

四、小川含章その他の影響

廣池は、明治十六年、大分遊学の時期に小川含章の麗澤館に入塾し、集中的に漢学の勉学に励む。麗澤館で教えられたのは漢学ばかりではなかった。「予の過去五十七年間に於ける皇室奉仕の事蹟」⁽²⁶⁾の中で、つぎのように述べ、欧化主義に傾く中で国体を守ることの必要性を教えられたとしている。

「当時只今の大分市に出て来まして麗澤館を開いて居る所に私は入塾致しました。丁度それは明治十五年でありました。(中略)先生の申されますには、一体我が日本の国家と云ふものは、日本の皇室の御祖先が我々国民の祖先を教育して、^{ママ}そうして我々に精神的・物質的のすべての生活の道を御授け下さったのであつて我々の祖先は何もかも一切の道を教へて下さった所の国の親に帰服して之によりて始めて日本と云ふ国家が出来たのである。他国の君主のやうに智識と武力によりて征服的に国を建てたのではないのである。日本以外の国は「天下は天下なり」と云ふので其国家の権利は君主にはなく人民に在りと云ふのであるが、我が日本は^{ママ}そうではないのであると申されました。(中略)天下とは即ち国家の事でありますが、此国家と云ふものは、君主のものではない。それは人民のものであると、^{ママ}こう云ふのが支那其他、海外諸国の国民思想であるのです。是れが即ち西洋にて「国家統治の主権は人民にあり」と云ふ事に当たるのでありますが当時は私は何事も存じませんでした。後に段々西洋の学問をして見ると、小川先生の御詞は悉く當つて居るのです。(中略)西洋は立憲政体であり日本は君主立憲政体であり

ますから、小川先生の御詞はいよいよ以て今日でも我国体に適合する真理であつて不都合はないやうに考へらるるのであります。」

廣池の国家観の樹立、アイデンティティの確立にとつて、大分の麗澤館時代に受けた影響ははなはだ大きいものがあつたと考えられる。あわせて大分時代に、廣池は皇典講究所大分分所の教師を通じて日本古典に關する教えをうけて、日本国家に対する考えを一層強固にしていたと考えられる。

廣池は、すでに見てきたように、大分において皇典講究所分所の教師を師として国学を学んでいた。大分遊学を終えて中津にもどつて、明治二十年からは国学者渡辺玄包に就いて国学をおさめている。⁽²⁷⁾

渡辺玄包は廣池の著書『中津歴史』に、つぎのような「序」を寄せている。

「世には外を知りて内を知らぬ者多かり、外国の学を学として我國の学を学とせざる者これなり、我國のことを不知して何を目的として我國の爲に盡すことを得んや……此書よ世にめでたき書にして、我國を思はん人の読まずには有べからぬ書なり、廣池主わか國を思ふ志深くてこそかかるめでたき書はなりけれ、我國を思はぬ人のなし得べきことかは」

渡辺玄包は大国隆正の門下であり、明治維新に際しては、天皇親祭・親政という祭政一致を支持する立場にたつていた。廣池が京都に出て、親しくかかわりをもつことになる富岡鉄斎もまた大国隆正のもとで学んだといわれている。とすれば中津から京都への移動にもかかわらず、廣池の思想的立場に変化はなく、むしろ同じ学統を求めて移動したともいえよう。

廣池は京都に出ようとしていた頃、もつとも傾倒していた人物は、国学者の増田宋太郎（一八四九—一八七七）であつた。既述のように増田の師は渡辺重石丸であり、篤胤門下であつた。井上頼国、大国隆正、矢野玄道などとともに同じ学統をうけていた。

廣池は自著『中津歴史』に長文にわたつて増田の伝を載せ、増田が西郷隆盛にしたがつて西南の役で倒れるまでの経過を長期まで詳細に記述している。ここにも廣池の増田に対する傾倒ぶりが示されている。廣池は『中津歴史』において増田のために多くのページを割いているものの、しかし増田の属する皇学派の立場については全面的に肯定しているわけではないとも述べている（同書 二九四頁）。そこに廣池と増田の思想的立場の相違が示されていると言えよう。

廣池に「増田宋太郎肖像に題す」という贊が残されており、宋太郎は「よく和魂学才を備えて神州男児に愧じざるの人物を養成する」人物として描かれている。廣池が最も増田から学びたいところがどこであつたかが、この言に示されている。

五、京都における廣池千九郎

明治二十五年八月、廣池は歴史学者を志して妻ともども京都に出た。京都に出るやすぐに既に郷里で準備していた雑誌『史学普及雑誌』の刊行を始める。

二十五年九月に創刊して、二十八年、二十七日で廃刊するまでに、客説欄に井上グループの記事が転載さ

れていることが特色である。これはとりもなおさず大分遊学中に接触しはじめた皇典講究所の人々との思想的親近感をもたらした結果であろう。以下に皇典講究所関係者の論文・論説が掲載された様子を示したい。転載された論文は『皇典講究所講演』掲載論文のほかに『東京学士会院雑誌』、『史学会雑誌』等に掲載された論文・論説であった。

井上頼囿 一号(祝辞)

久米幹文 一号(祝詞)三、四号

内藤耻叟 一、二、三、四、五、九号

黒川真頼 十一、十二、十五、十七、十八、二十一、二十二、二十四、二十五号

小中村清矩 十三号

木村正辞 十九、二十号

廣池は京都において和漢の古典を涉獵し深く読破していくことに大半の時間を費やした。しかし、その多忙な時間をぬって著書を発行している。それらの著書にも皇典講究所関係者の論説が多く引用されている。

『日本史学新説』(明治二十五年十一月刊)に引用されている文章の執筆者は下記の通りである。※印は皇典講究所関係者である。

※佐藤定介 ※今泉定介 ※飯田武郷 ※内藤耻叟2 ※黒川真頼 ※落合直文 星野恒15 ※佐藤誠

実 久米邦武10 田口卯吉 重野安禔 ※川田剛 ※小中村義象 ※井上頼文 管政友 廣池千九郎2

渡辺重兄 ※三上参次 池田晃淵 小倉秀貫2 松浦辰男 田中義成

また『皇室野史』(明治二十六年五月刊)に引用された論説の執筆者は下記のとおりである。※は皇典講

究所関係者である。

※三上参次 p363 p399 p406 p435

※萩野由之 p369 p405 p407

星野恒 p383

池田晃淵 p389 p398 p403

※内藤耻叟 p392 p407 p432 p433 p447

六角博通 p408

山科言繩 p408

松村巖 p424

※栗田寛 p437

富岡謙三 p440

さらに廣池は『平安通志』の編纂に加わっている。この編纂事業参加については廣池みずからエピソードを語っている。それによれば、時勢の推移にもなって生活の資にしていた『史学普及雑誌』の売れ行きが伸び悩み、堺にある書店まで本を卸しに行った帰り、住吉大社で五か条の誓いを立てたという。ときあたかも明治二十七年七月三十一日であった。帰宅してみると京都市参事会から『平安通志』編纂協力の依頼がきていた。経済的に苦境にたたきだされていた廣池にとっては思いがけない喜びであった。廣池はその収入で両親を京都に呼び寄せ、京都博覧会を見学してもらったり、市内の名所を觀てもらい、親孝行の限りをつくすことができたのであった。日清戦争開始前日のこのエピソードは廣池にとっても生涯忘れられない出来事とな

栗田寛の諸大家の意見が斟酌されたという（小林前掲書）。

このようにみえてくると、廣池の『平安通志』編纂事業への参画は、いつてみれば舞台装置ができていたともいえよう。廣池の学力が評価されればいつでも拔擢される状況が整っていた。

廣池は、住吉大社での誓いの翌明治二十七年八月一日、井上の訪問をうける。そのときの会談で廣池の『古事類苑』編纂事業への参加が話しあわれたという。それは全く『平安通志』編纂事業への参加と同時にあった。偶然と思えるほどに時間が一致している。廣池は「この日（八月一日）、これ（『平安通志』への参加）を承諾し」と記している²⁹。背景に井上の配慮があったとみてもよいのではなからうか。そしてそれを引き出したのは、廣池の学力と人格であったことはいままでもない。

京都在住の期間、廣池は富岡鉄斎の知遇を受けるのであるが、鉄斎は維新当時の井上との関係や、その後『平安通志』編纂にともに参画したことなどもあって、廣池上洛の早い時点で具体的な関係が生まれていたと推測される。

以上、廣池と井上を中心とした人々との関係を図示すると前頁のようになる。

六、結び

維新を経た日本にはヨーロッパ近代文明が滔々として流れ込んできた。そうした時期に際会して、どのように対処していくべきか。何を基本としていくべきか。人々はその選択に迷った。

廣池は、明治十三年、十四歳ころに家系上の自らの立場を自覚するにいたった。そして神官の家系に連なる人間として生きていくことを決断した。これは生涯かわることがなかった。同時にヨーロッパの文明にも目を開いていき、和魂学才という自らの立場を打ちたて、国学者に接近していった。明治十六年に大分に開設された皇典講究所大分分所を通じて、国学者に就いて日本の古典を研究しはじめたが、それは井上頼圀を識ることもあった。井上はじめ井上の開設した皇典講究所の人々との思想的立場を同じくすることの決断でもあった。

京都へ出てからの廣池の活動は研究と出版とであるが、出版された『史学普及雑誌』にも『日本史学新説』にも『皇室野史』にも、井上および彼のグループの人々の影響が顕著である。『平安通志』編纂への参加も、井上の影響を抜きにしては考えられない。『平安通志』編纂への参加と『古事類苑』編纂への参加が、ともに井上との会談によって決定されたと思われる。

廣池はその後京都を離れ、正式に井上門下の人間となり、東京で十三年間、『古事類苑』の編纂に尽力する。その中で中津以来もとめていた「和魂」の内実を明らかにしていくこととなる。その際にも井上と連絡をとりあっている。

廣池の恩師は他にもいるが、井上ほど深く、長く人間関係を結び、門下の人々と交流をもつようになった師はいない。その井上を選択する決断をしたのは、自らの出自を自覚して、和魂をもって生きようと決断したことと、新生明治国家をつくりあげようとする激しい情熱とからであった。

注

(1) 田辺勝哉編『井上頼圀翁小伝』大正十年。

林。

京都市編『京都の歴史』七、昭和四十九年刊、学芸書

- (2) 田辺前掲書。
 (3) 上田万年監修、一九六七年復刊。
 (4) 富岡益太郎「富岡鉄斎年譜」(『鉄斎研究』四号、昭和四十六年)。
 (5) 正宗得三郎「鉄斎翁の皇学」(『美術工藝』二十一、昭和十八年)。
 (6) 富岡とし子「富岡鉄斎の交友話記抄」(『心の花』六六号、昭和二十九年)。
 (7) 「皇典講究所五十年史」p.56、昭和七年刊。
 (8) 「国学院大学百年小史」昭和五十七年。
 (9) 大分県立大分図書館所蔵「皇典講究所分所弁理員心得書・その他」。
 (10) 「国学院大学百年小史」p.46。
 (11) 宇佐市史刊行会「宇佐市史」下巻、昭和五十四年。
 (12) 国学院大学八十五年史」p.57。
 (13) 同上「八十五年史」p.57。
 (14) 「廣池千九郎博士資料集」(以下「資料集」と記す)七十四、p.13その他。
 (15) 「廣池千九郎日記」二、昭和六十一年。
 (16) 前掲「宇佐市史」下巻。
 (17) 「廣池博士の学問上に於ける経歴」p.2。
 (18) 井上頼寿「廣池博士の書状」(『社会教育資料』六十四、昭和四十六年)。

- (19) 同上。
 (20) 明治三十九年推定(『資料集』七十四、p.15)。
 (21) 大正三年(『資料集』二十、p.61)。
 (22) 明治三十五年推定(『資料集』七十四、p.10)。
 (23) 明治四十五年(『資料集』十一、p.25)。
 (24) 「史学普及雑誌」に掲載された内藤の論説はつぎの通り。「我史は彼聖経にまされり」(一号)、「徳川氏官制」(二、三号)、「松平伊豆守信綱の名誉に就きて」(四号)、「織豊二氏の滅ぶる所以」(五号)、「国史自ら国史の体あり」(九号)。
 (25) 明治三十五年推定(『資料集』七十四、p.10)。
 (26) 復刻版「廣池千九郎モラロジー選集」第三巻(昭和五十一年)所収。
 (27) 「廣池博士全集」第一冊、昭和十二年。ここでは昭和四十四年刊の第二版に依った。
 (28) 小林丈広「平安通志」の編纂と湯本文彦——一九世紀末京都における「知」の交錯——(明治維新史学会、明治維新史研究七「明治維新と歴史意識」二〇〇五年)。
 (29) 「資料集」七十四所収の履歴書。
 (補注) 文久三(一八六三)年二月から三月にかけて、渡辺玄包と頼圀の師榎田直助とは、幕府の搜索をのがれるために長州屋敷にいた。

本稿執筆のため京都市立総合資料館 松村章平氏、大分県公文書館 竹内雅之様、武田信也様、大分県立図書館 辻さやか様のお世話になった。記して篤く御礼申し上げます。